市芦救援会通信

市芦救援会通信 通巻44号 90／9・10合併号 〈1部100円〉 発行人 玉本 格
市 芦 救 援 会 〒659 芦屋市剣谷9 市芦分会気付 TEL 0797(32)1131
市芦反弾圧闘争を支援する会 〒650 神戸市中央区元町通5丁目3の16 テーラビル3F

日程
第30回審理 10月22日(月)15:00～ 小林証人反対尋問
第31回審理 11月22日(木)10:00～ 小林証人反対尋問

公平審闘争勝利・松本再任拒否を決議

9／9市芦反弾圧闘争四周年集会成功裡に開催

も／く／じ

特集 9／9市芦反弾圧闘争四周年集会
人でなし松本教育長の再任拒否・処分撤回・原職復帰を勝ちとろう！ 市芦救援会事務局 …… 2
集会雑感 …… 事務局 …… 3
管理教育体制に抗し共に教育をとりもどそう …… 市芦救援会会長 玉本 格 …… 4
兵庫県教育行政の反動化 市芦処分と高塚高校事件の背景 …… 兵高教委員長 岩渕徳好 …… 7
集会決議 市芦を教育の場として再生せよ …… 9
記念講演 子供たちの願いと共に―ゲルニカと「日の丸」 …… 長尾小学校 井上龍一郎 …… 10
学校の主体は生徒である！ …… 定通つぶしを許さぬ会 加藤捨三 …… 20
第28回公開口頭審理報告 処分の不公平さ杜撰さを次々暴露
処分手続き、基準も小林立証できず …… 市芦救援会事務局 …… 22
公平委員会を傍聴して思ったこと …… 久保田靖子 …… 25

特集●九／九　市芦反弾圧闘争四周年集会

人でなし松本教育長の再任拒否
処分撤回・原職復帰を勝ちとろう！

市芦救援会事務局

去る九月九日、「公平審闘争勝利・松本再任拒否　市芦反弾圧闘争四周年集会」を芦屋市民センターで開きました。今年は市芦救援会・市芦分会・市芦反弾圧闘争を支援する会・兵高教阪神支部の共催となり、会場には多くの市民、市芦卒業生をはじめとして、兵高教、芦教組、園田学園中高等学校教組などの教組や、国労連帯阪神地域の会、関西争議交流会に参加する各地の争議の仲間など一五〇名もの参加者が、日曜日にもかかわらずかけつけて下さいました。ここにあらためて厚く御礼を申し上げます。

会場入口には、国労連帯の物販、各地の仲間の闘争パンフ・冊子がならべられ、会場は満員の参加者で終始熱気につつまれていました。

最初に市芦救援会の玉本会長からの挨拶があり、地域で着実に闘いの輪が広まっている事を紹介された後、「一九七〇年代後半からの兵庫県教委による管理教育体制の下で同和教育つぶし、教師の強制配転が強行され、それが市芦処分につながっている。そして神戸高塚高校問題にいきついた」と、管理教育強化の流れに対して厳しい批判をされ、「公平審闘争を続け、教育を正しくとりもどそう」と力強く訴えられました。（後掲）

次に市芦救援会滝山事務局長から、救援会第三回総会としての経過報告があり、「『松本教育改革』が教員の処分・分断支配から教育内容への直接支配へと向う中で、教育破壊のみが進行している」と指弾し、「生徒の教育権保障闘争と結合し処分撤回・原職復帰闘争を、そして今秋の松本教育長再任を許さぬ闘いをとりくもう」との提起がありました。

続いて弁護団の分銅弁護士からこの間の審理報告がなされました。（抄録後掲）

支援・共闘団体として、芦屋地労協の岩崎副議長からは、松本教育長のやり方は中曽根元首相による国労つぶしと同じとの批判がなされ、生徒切り捨ての実態に触れて、この間神戸第一学区との併合問題、市芦入試での定員内切り捨て反対の闘いを地労協としてとりくみ、今後とも共に闘っていこうとの支援連帯の挨拶がなされました。

続いて兵庫高等学校教職員組合岩淵委員長から、一九七〇年代後半からの兵庫県教委による管理教育体制の強化、教員弾圧の流れと、市芦処分、神戸高塚高校事件の背景に触れ、子供を中心とした教育活動を展開していこうと訴えられました。（後掲）

会場には教組・労組・市民運動団体など多数の支援団体からの参加者が来られていましたが、集会進行上、ご挨拶に代えて団体組織名のご紹介のみにとどめさせていただきました。また自治労淡路・阪神ブロック共闘会議からの闘争激励電も読みあげられました。

続いて、福岡市長尾小学校の井上先生から「子供達の願いと共に―ゲルニカと日の丸」と題しての記念講演が行なわれました。井上先生は、一九八八年三月の卒業式で、「卒業生が国歌斉唱を拒否し、担任（井上先生）もそれに呼応して、参列者に多大な不信を招くという公務員としてふさわしくない行為をした」（市教委処分説明書より）として、同年六月に戒告処分を受け、市人事委員会に不当処分撤回を求めて不服申し立てをされて、現在も審理闘争を続けておられます。講演では、市人事委員会のあまりに権力的な審理指揮の実態を報告された後、六年生を担任しての一年間の生徒との日々の出会いをていねいに話していただきました。肩をはらず、生徒と同じ目の高さで接っしてこられた話を、ユーモアたっぷりに話され、参加者一同に深い感銘を与える講演となりました。（後掲）

最後に集会のまとめとして、市芦深沢分会長により集会決議文（後掲）が朗読され、集会参加者全員の拍手でもって採択されました。

集会雑感

事務局

市芦教育つぶしの露骨な組合弾圧がはじまって四年が経過しました。不服申立人は、この夏の酷暑で少々体調を崩し気味ですが、この集会でまた元気が出たようです。久し振りの卒業生との出会いや、この一年間で各地で知り会った人々との出会いは、何よりのはげましになっています。

とりわけ井上先生の講演は、アレコレの分析にとどまるのではなく、「実際に活動を作っていくこと」の大切さをあらためて感じさせるものでした。子供達と共に体を動かして創り上げていく、そんな中で子供達も井上先生も変わってゆく。人間の表情を細やかに取り出される話で、とても元気が出ました。

集会当日配布しましたリーフレットは、通信八月臨時号として発行いたしましたが、各地で人から人へとお配ばり願えればと思いますので、ご希望の方は救援会宛にご連絡下さい。無料でお送りいたします。

集会当日、井上先生の赤パンフがよく売れました。中には、集会後に井上先生を囲んでパンフにサインをしてもらってる芦屋の熟年女性の姿もみられ、「たくさん講演に行ってますが、こんなのははじめてです」と、井上先生もちょっとしたスター扱いに少しとまどい気味でした。今頃福岡で話題になってるかもしれません。

集会で皆様から寄せられたカンパは総額七三二三九円でした。ここに厚く御礼申し上げます。今後ともかわらぬご支援をいただきますようお願い申し上げます。

管理教育体制に抗し 共に教育をとりもどそう

市芦救援会会長　玉本　格

早いもので、もうはや丸三年すんだのかとつくづく思います。そのうち、私が一番感動しているのは、市芦の九人の先生方が一丸となって、色々なこういう準備だとか、色々なことで走り回っておられる。そこへ弁護士さん三人が一緒になって、公平委員会の審理の中味などについて、根掘り葉掘り細かく研究されて、公平委員会で向こうの人がどないも言えん所まで追いつめられていく、ということの御努力は大変だと思います。それみていまして、本当に弁護士さんや市芦の先生方に、先ず僕はお礼をいいたいと思う訳です。

それから、ここに居られるのはほとんど救援会の皆さんだと思いますけれども、救援会だとか、支援する会とか、今日はちょっとお顔をみていないんだけれども、小川先生も御高齢だのに、大抵の御用のない時は杖ついて公平委員会にも出て下さる。そういうこれまで一緒になってやって来られた先生方、そういう方の御支援も大変ありがたいことだと、いつも思っております。

そういう先生方の努力の結果だと思うんですけれども、教育を考える芦屋市民の会が生まれたり、みんなの麦の家とかが生まれたり、神戸の方で私も色々やりますけれども、はぐるま座の蟹工船の上演、あるいは今日も中心になってやっておられた方がおられますが、アウシュヴィッツの展示会だとか、そういうような文化的な行事が次々と芦屋の中で生まれていく。そういう姿に私は非常な喜びを持ちます。芦屋いうのはもう文化都市とちがうやないか、と思いよった所が、だんだん文化が芽生え、拡がっていきつつあるという、そういうことを、今感動をもってながめさしていただいている訳であります。

それでちょっと話が横になるんですが、この間の高塚高校の時にもちょっと話したんですけれども、あの先生、これはもう命を大事にしない実にけしからんのですね。けしからんのはけしからんのだけれども、その人を処分しただけで、あと涼しい顔しているのがいるんやないかという事、それが言いたい訳です。これ許しておく訳にはいかんと思うんです。

腹立たしいこと

私も一番腹の立った事がある訳です。それは忘れもしませんが、一九七六年、私は神戸

市の同和教育研究協議会というのを、私が中心になって作っておったのですが、そこから出て青陽東養護学校の校長になっておった時に、もう一遍頼まれたんですね。神戸市同教の会長をやってくれ、いうて頼みこまれたんですね。その時に、何気なしにしゃあないなほんなら、いうて引き受けたんですが、第28回全同教大会を神戸でやるのを知らなかったんです。それはね、兵庫県の同和教育研究協議会が受けてきていたんですが、どこでやるか決めてなかったが、実は神戸でやるというのを決めておったんですが、それを知らなかった。ほなやらしてもらいますわ、いうた後で、本当に二年間、めちゃくちゃになるほどしんどかったんですが、なんでそんな話してるかいうとね、大きく世の中が管理体制に変わったのはその時からなんですね、文部省が厳しくやれということを言い出したのは。

それを全部そっくりとってきたのは兵庫県教委なんですね、その兵庫県教委の当時の名前はいいませんが、教育長に着任してきた人がいる訳です。この人が兵庫県の教育をめちゃくちゃにしてしまった、ということ。今まで全同教大会は二万人の人達が集まりますから、全同教というのは人権の問題で先生たちがたくさん集まって研究する場というて、補助金が出ている訳です。どの府県からも出ているんです。ところが、第28回全同教大会に一文の金も出さなかったのが、兵庫県なんです。兵庫県だけですよ。

それから後どういうことがあったかというと、本当に子供の側に立って、夜、昼なしに子供の事でやっていらっしゃる先生が生徒のために、校長先生や県教委に対して要望されますね、それが邪魔やいう訳で強制配転ということを全然事前の相談もなしにボーンとばすいうことが、兵庫県で始まった訳ですよ。あれからなんです。ほんで職員会議は決議機関ではない、と職員会議はやらんようになって、そして校長が決めたことが全部それが議決や、決定や、と職務命令そのものが決定や、とそういうやり方をしてきたのが兵庫県なんです。

それのもっともひどい僕の知っている最後の問題が市芦なんです。それを忘れることはできないと思うんですよ。このことから先生方もうっかりしたことが言えなくなったり、そして管理体制がどんどんどんどん、とくに若い先生達はそういう管理体制が悪いという事がわからんままに、上から命令のままに動く、校長の命令のままに動くというような事で、そういう結果が、それに得得として動いていた結果があの高塚高校までつながっているんじゃないか、ということ。一番元は誰や、ということを私達は見逃したらいかん、これは追及せないかんと思います。現実に追及しておられます。新聞などをみても、兵高教などもやっておられますし、ぜひこれはやらないかんと思っています。この機会にぜひとも言いたかった訳です。

それから、ここに井上先生が来ておられますが、この間、井上先生をお呼びしたのは市芦の先生方やと思うんで、えらいなあと思うんですが、私も先日、お話をききました。すばらしいお話でした。これが本当の教育だというお話でした。是非、今日も最後まで聴いていただきたいと思うのです。そしてこの事が、私は市芦の先生方ががんばって、とことん皆さんと一緒に腕を組んで闘うことによって、本当に兵庫県の教育を、芦屋の教育をすばらしいものに、日本の教育を問い直していかねばと思います。

あまり長くなってはいけませんので、公平委員会も皆さん方のおかげで、市芦の先生方の御努力と弁護士さんの御努力によって、向こうの人に物も言えないような所まで、今、追及していっている訳ですね。これをますます続けていって、ここに書いてあるスローガン、そのことが教育を正しく元に戻していく事につながるんです。とにかく勝負しましょう。みんな力を合わせてやろうじゃありませんか。終わります。

弁護団審理報告〈抄〉

処分の不当性をつぎつぎと暴露

弁護士　分銅一臣

停職一ケ月処分、強制配転の四件を併合審理で二九回まで審理しています。処分者側は前田市芦元校長、小林前管理部長の二名が証言。傍職処分についての反対尋問で、処分証拠書類として提出されていた学校日誌が、改ざんされていた事実を暴露し、処分の不当性を一層明らかにしました。

小林証人については、組合支部書記局前に市教委役人が張りこんで組合活動をスパイしていた事実や、教員定数について国の定数法を上まわって生徒の教育を保障してきた市芦教育に対して、その加配教員を定数条例を改めて強制配転したことを処分者として主張してきました。

問題となるのは教員の勤務時間で、一週四二時間の中で割りふるのですが、神戸市などでは学校長が個々の教員の勤務により割りふりをする権限をもっているのですが、芦屋市の場合、学校長にない。そんな中で、勤務時間内の教員の監視について、毎日校内巡視をしてきて、無断職場離脱として処分しています。しかし、学校日誌に名前が載せられた先生の中でも、実は公務で出張しているのに、出張申請を一括不承認にして、無断職場離脱として処分していることが明らかとなっています。色々と矛盾が出ているのです。

現在、鈴木先生の強配に関する反対尋問に入っています。市の行政改革大綱との関係などを追及しているところです。

今後、来春頃からこちら側の主張をはじめていくことになると思います。市芦処分が、市芦教育つぶしを目的としていることから、市芦教育の中味をとり出し、教育とは何かという総論を行ない、本件についての各論に入っていく予定です。

この市芦の事件に関わっている心境について、本日の新聞で高塚高校の校則が一八項目削除されたという問題が出ていました。弁護士会でも以前から校則を見直そうととりくんできました。生徒管理症候群に今の先生方は陥っているのではないか。もっと生徒とふれあっていく教育について、再起の所にあったのが市芦教育だろうと思っています。

管理教育について、一昨年アメリカに行った時に大変おどろいたのは、学校に塀がないということで、日本の学校の校門というのは外からの侵入を防いでいるんじゃなくて、生徒が外へ逃げ出さないように、生徒を管理する為の校門だと思います。

子供の為の教育とは何なのかということが問われないといけない。これを問うているのが市芦教育であり、それを変えようとしたのが市教委だと思う。

この間の審理を準備していく会議で、私たちは色々学んできて、この闘いは是非勝たなければいけないと思っています。まだ先の長い闘いですが、皆さんの支援をいただき、彼らが市芦に戻った時、何もできない状態にされていたら、この公平委闘争は負けです。戻った時に前と同じ状態で働ける職場を維持できることを考えていますので、皆さんのより一層のご支援をお願いしておきたいと思います。

兵庫県教育行政の反動化
市芦処分と高塚高校事件の背景

兵高教委員長　岩渕徳好

今日は数少ないネクタイ組の一人でございますが、最近、マスコミなどに、一体学校の教師は何をしているんだ、とお叱りを受けておりますし、飲屋に行ってましても高校の教員とわかると、隣のおじさんあたりから、ジロッと睨らまれたりしますので、襟を正しています。

本当に、先程からずっと聴いていますと、現場の教員の一人として、大変いたたまれない気持をもっています。市芦の問題も高塚の問題も、根はやはり一緒だというふうに思います。

玉本先生は非常に思慮深い方ですので、さっき名前を出されませんでしたけれども、一九七五年に兵庫県の教育長に小笠原という人が就任しました。彼はそれまで同和教育に根ざした、「教育の谷間に光を」をスローガンに、定時制の生徒とか、被差別下におかれている子供たちに光をあてる、文字通りそういう教育を色々な困難な中でも押し進めてきた訳ですが、彼は、それはあかんのだと、やっぱりエリート教育をしなければあかんのだと、金のかかる教育はあかんのだということで、一八〇度方針転換しました。

御存知だと思いますけれども、一九七五年頃に、神戸とか姫路の地区で総合選抜を実施する気運が高まっておりましたが、それを彼が凍結をする。それから、兵庫方式といいまして、受験期の受験競争を緩和する形で創設したものを、年々改悪してきました。

一方で、「教育の中に厳しさを」というスローガンのもとに、翌一九七六年に、「生徒指導体制の強化について」という通達を出しました。ものすごい通達でございます。生徒に対して毅然と立ち向かえ、手に負えない場合は警察も導入して、という事をはっきりと明記した通達で、その後、兵庫県の教育行政がこの通達にそって行なわれてきたのです。

その中で、市芦の先生、あるいは私達の仲間が沢山いる訳ですけれども、子供の側に立って教育を進めようというふうに頑張ってきた教師を、いろんな形で弾圧してきました。強制配転も出ておりましたし、市芦の場合は、特に教員の職を追うという形になってきておりますので、これは大変な事だと思います。議会の方で定数を減らした上でとばしておりますので、その辺をくずさないと単なる配転問題ではすまない事がありまして、大変きびしいと思います。

従って、そういう厳しい教育行政の下で、体罰を平気で肯定する教育が行われてきたといえます。力でねじふせる、そういう形で教員が、管理職とか教育委員会から督励されたタイプの教員が、教育熱心な先生ということで学校を牛耳ってきた訳です。

そういう事で、今回のような事件が起こってきた訳ですけれども、事件当初はマスコミとか世間の批判にさらされまして、教育委員会も平身低頭に謝るそぶりをしておりました

が、昨今は、かなりひいてきています。こういう事を見計って、当初からの考え方だと思いますけれども、今回の事件は単なる細井一教諭だけの問題であり、教育委員会は関知していない、という事をはっきり教育委員会は言っている訳です。

その端的な証拠は、先般、八月二三日に神戸地区の指導部長協議会というのが開かれまして、神戸市内の高等学校の生徒指導部長を前にして、教育委員会の係長が、今回の事故は、「日本の、一県の、一高等学校の、一教諭による、一生徒の事故」だと、そういうふうに言っています。その上で、「従ってこういう事なんだから、校則がどうのとか、管理教育がどうのだとかいうのは一切関係ない。これまでの教育は正しい、自信をもってやってくれ」というふうにはっぱをかけています。

自分たちがおしつけて、それを忠実に守ってこういう「事故」になった。こういう「事故」が、一旦起こった場合は、教諭に責任を転嫁して、県教委は全く関係ないと開き直っている。このような県の教育行政を受け継いできたのが市芦の今の教育委員会だと思います。

そういう事で、この根は大変深い。一朝一夕で今の教育のあり方が変えられるとは思いませんけれども、ひとつの学校からでもいいですから、生徒の人権、あるいは学習権を見据えた上で、子供を中心とした教育活動を展開していこうと内部で意志統一しています。

最後になりましたがお願いがひとつございます。これは日教組が今年度の定例大会で提起している訳ですが、昨年に国連で採択されました「子供の権利条約」というのがございます。それに、もう一つ、今まで長い間いわれてきて、実現しないで今日まできております、「学校五日制」の問題です。この二つの問題とあわせまして、教育費が現在、年々下がってきており、かっては国家予算の一二%ぐらいあったのですが、だんだん下がって、現在は七%を切っています。

そういう中で、教育費の一〇%確保。この三つのスローガンを掲げて、日教組が新しい体制で臨んでいる訳ですけれども、この秋から、五千万人署名を提起しています。五千万といいますと、日本の有権者の大体六割にあたるので、大変な数の署名を集約しなければならない訳です。けれども、私ども仲間の内側から教育のあり方を変えていくと同時に、やはり大きな力で日本の教育を変えていかなければならないと思います。

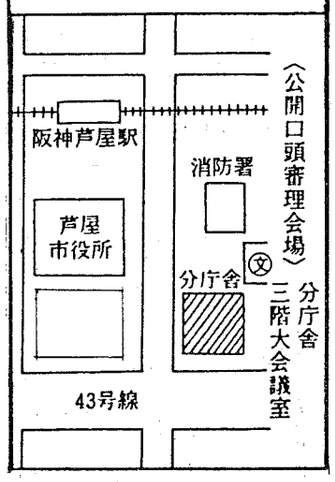
その中でも特に子供の権利条約というのは、子供の意見表明権を認めるということで、これまで半人前として子供を扱ってきた私達の教育観を一八〇度変えなければならない。もし日本政府がこれを批准すれば、関連する国内法を整備しなければならない、ということで大変画期的な条約であります。外側からの力もお借りしまして、日本の教育を変えていきたいと思っております。五千万署名のとりくみについてここにお集まりの皆さまのご協力を是非お願いしたいと思います。

私どもからのお願いみたいな趣旨になりましたけれども、兵高教としての挨拶にかえさせていただきたいと思います。共に頑張りましょう。

審理傍聴のご案内

■第三〇回
一〇月二十二日(月)
PM 3〜

■第三十一回
十一月二十二日(木)
AM 10〜



集会決議

市芦を教育の場として再生せよ

一九八六年九月二九日、芦屋市教委による弾圧が開始され、市芦反弾圧闘争が始まってからすでに四年が経過した。

そして今年の春、「新生市芦の第一回生」と呼ばれた生徒たちが卒業していった。

この「教育改革」一回生たちは、応募者が定員を満たしていなかったにもかかわらず入学試験で大量三三名が切り捨てられ、入学してからも処分や規則による硬直した生徒指導によって二七名が退学に追い込まれていった。その結果、学年定員一四一名のうち卒業した「教育改革」一回生は、わずか七四名であった。

教育委員会は「受験高校作り」をスロガーンに掲げ、そのためにはどんな犠牲もやむを得ないとして「教育改革」を強行した。生徒の側に立とうとする教員九名を強制配転により学校から排除し、少数の大学進学希望者のためにだけ作られた教科課程を押しつけ、大多数の生徒を犠牲にした。こうした「教育改革」が教育条件を破壊するものであったため、学校の教育力は極度に低下し、彼らが目玉とした「教育改革」一回生の大学進学ですら、推薦入試による二名だけという無惨な姿を晒すことになった。

教育委員会は「教育改革」の名のもと、障害児を学校から排除し、成績の悪い生徒や学校の用意した規格からはずれる生徒を限りなく学校から排除した。これまでの市芦では、規格化されることのない個性が集合し、そこで擦れ合い、きしみながら、鍛えられ、成長していった。こうした個性の多様性こそが、市芦の豊かさとして卒業生やその親たちに認められ、確実に支持されていた。

「教育の豊かさとは何か」を全く理解しない者たちにより、「良い大学へ進学すること」を唯一の価値基準とする競争原理が強引に市芦の中に持ち込まれ、生徒の諸権利を踏みにじる生徒管理だけが先行していった。そこには、かつてのような生徒と教員の間の対話が成立する条件はなく、規則を間に挟んだ関係の中でしか身動きできない状況がある。

「教育改革」が開始されてから毎年に校長が代わるという無責任な体制の中で、「教育改革」二回生もまた卒業生が八〇名を割りそうだという。

「教育改革」は教育破壊をもたらし、多くの犠牲者を出しただけで、何も生み出すことはなかった。「教育改革」はすでに破綻している。にもかかわらず、「教育改革」にこだわり続けるとすれば、それはもはや、松本教育長の権力維持と教育委員会による学校の権力的支配を続行するための、偽装として「教育改革」が使われているにすぎない。

「教育改革」の名のもとに、松本教育長がこれ以上子どもを犠牲者にすることを、私たちは許すことができない。

教育委員会が全ての子どもに、教育権を含む全ての人権を保障することを要求する。

市芦を教育の場として再生させよ。

1. 公平審理闘争に勝利するぞ！
2. 処分を取り消し、九人の先生を市芦に戻せ！
3. 生徒切り捨ての「教育改革」を許さないぞ！
4. 人でなし松本教育長の再任を許さないぞ！

以上決議する。

一九九〇年九月九日

市芦反弾圧闘争四周年集会参加者一同

記念講演

子供たちの願いと共に
―ゲルニカと「日の丸」

長尾小学校　井上龍一郎

こんにちわ、長尾小学校の井上です。先に本のことを言っておきますと、卒業文集とか、子供たちの生の声がいろいろと入っていますので、一冊といわず、何冊かお買い求めの上、お帰り下さい。作ったのは、うちの保護者たちを中心とした「子供たちのゲルニカを考える福岡市民の会」でして、まだ中学生の子供たちの思いなどを代わりに伝えていきたいということで作りました。自分たちの言いたいことはたくさんあるけれども、まずは資料をどんと提示して、読む人の判断に任せようというつもりで作ってあります。お母さんたちが、「千円を超えたら、よう売り切らんけん」というので、千円にしたんですけど、印刷屋さんからはひどく怒られました。「あんた、それでは全然あがりがなかばい。持ち運んだらガソリン代がいるし、郵送したら切手代で確実に赤字になるやないか」と言われておりますので、できるだけたくさん、まとめて買って下さい。

福岡では人事委員会というんですが、こちらの公平委員会も名前とちがって全然公平じゃありませんね。僕たちのほうも、教育委員会と足並みを揃え、きちっと打ち合わせをして進んでいる展開です。ですから、どんなに有利な具体的事実を出していってもダメかも知れんなという状態ですので、そのときには裁判に持ち込んで最高裁まで闘うつもりで、裁判費用をプールしていこうということで、お金を集めています。

組合つぶしの「高石教育改革」

松本教育長みたいなのは、福岡にもいます。ただ違うのは、こちらでは「人でなし」というのがつくようですけど（笑）、うちの方では、こういうのを一切つけません。なにしろ、「高石邦男」という名前ですから。ときどき「妻が妻がの高石」とは言いますけど（笑）、だいたい「高石」だけで笑えます。ただし笑ってばかりもいられません。一九八八年のうちの学校の卒業式について処分が出たのは、その年の六月のことでした。高石の問題が出たのは、それから夏を越して秋に入ったころのことじゃなかったかと思います。

高石が次の衆議院選挙に立候補するということは、学校の中でほとんど話題にもなりませんでしたし、私たちもほとんど知らなかったんですが、立候補すれば、高石の立場からして、当然、福岡県の教育の「正常化」というのが選挙運動の柱になります。その時期、福岡県では、処分が長尾小学校に限らず乱発されていました。日教組が牛耳っているから福岡県の教育がこんなに荒れているんだという選挙運動をやろうとしたわけです。これは、福岡県では二度目のことです。今から二十数年前、一九六〇年代の終わりのことでしたが、福岡は石炭と鉄の県で労働者がたくさんいま

したから、県政は社会党がとっていました。これに対して自民党が県知事選を闘って勝ったときに、教育の「正常化」ということが掲げられていました。

そのあと、高石は岐阜や名古屋のあたりで組合つぶしをやって文部省に一回もどったあと、福岡県の北九州市に教育長としてやってきました。弾圧を加えながら処分をやる。エサをまきながら教員を研修づけにして出世させていく。そういう松本そっくりのことをして、文部省に戻っていきました。最高裁で最近判決が出ましたが、高校のほうで伝習館が弾圧を受けたのもこのころのことです。あれも同じくデッチ上げ的な処分でして、それから組合がひどい弾圧を受けていくことになります。

草の根右翼の煽動

長尾小学校の卒業式にまつわる処分も、この再現を狙ったふしがあります。そのことを処分後のPTA総会の席上、校区にいるマスコミ関係の方が暴露され、校長もそれに乗っていたではないかということで糾弾されました。さらに、勝共連合との関係のあるPTA会長の謝罪をも要求するという、PTA総会となりました。草の根右翼という形で、福岡市の中では、いくつかの学校で教育の「正常化」という動きがあったのですが、それが長尾小学校の卒業式をめぐって噴き出してきたわけです。PTA会長とごく一部の人だけが、学校の中ではこうなっているというデマを流して校区を煽っていったのです。

教育委員会も、そういった人たちの声や、勝共連合の推薦議員の議会での追及に乗って、自分たちの目指す所を推し進めたふしがあります。教育委員会は教育委員会で、臨教審とか、教育課程審議会の答申とか、そのころ出されようとしていた新学習指導要領の先取りを方向として打ち出していましたので、その方向を一体となって処分という形で出してきたものと僕は考えています。

ところが、この処分は、事実をきちっと調べることもなく、出されたものなんです。実にずさんな調査でした。校長の報告や地域の右翼的な人たちの抗議の声だけをそのまま事実として受け止めたのですから、教育委員会は事実をしっかりつかんでいませんでした。僕も三月と四月の二回にわたって教育委員会に呼ばれましたが、そういった人たちの抗議の声について質問を受けただけでした。質問してないところは向こうは聞いてないわけです。こうしてたいへんあたふたと決まった処分だったわけです。

今日の集会の案内の中に、「国歌斉唱拒否を口実とした処分」に抗して人事委員会闘争を闘っていると私のことが紹介されておりまして、私はまごついたんですが、多くの処分は国歌斉唱拒否を口実としたものではなく、国歌斉唱拒否を処分したいがために、勤務時間内に職場を離脱したとかいう口実を別個に設けたものなのです。長尾小の場合は、国歌斉唱拒否は一切許さないということが狙われた所なんです。それなのに、この集会の案内でこう書かれているということは、教育委員会の処分の理由が事実をつかんでいないためにひどく混乱せざるをえなかったと、そのように主催者の方が読んでこう表現されたのだと思います。これが間違いのもとだと（笑）、間違いのもとは教育委員会の処分だと、なんだかややこしい話になりました（「ややこしくない」とヤジあり）。教育委員会の本心をすっかり暴いた非常にいいビラですね（笑）。

人事委員会の権力的指揮

処分から一年たって、去年の四月二六日に第一回の公平委員会が開かれました。この四月二六日というのが、たいへん記念すべき日だということに教育委員会の方はほとんど気がついてなかったようです。この日はちょうど、ピカソにゲルニカを描かせたナチスのゲルニカ爆撃の日なんです。おかげで嬉しいことに、この日の集会は千人規模のたいへん大

きな集会となりました。教組の福岡支部の支部長、副支部長、書記長が僕と並びまして、この集会の中で、長尾小学校をふくめた福岡の卒業式のあり方や職員の思いとかいったことについて、意志一致ができました。

六月の二回目は、校長を証人として呼んで、処分庁側の主尋問が行なわれました。教頭を呼ぶ八月の三回目については、僕たちは二時間ずつの反対尋問を要求していました。ところが、人事委員長はこれをすべて二十分に制限してきまして、十月の四回目には早くも結審とすると声明してきました。僕たちの側から申請している保護者など十数人の証人をすべて認めず、校長と教頭という、処分庁側の二人だけを証人として結審に持っていくという、非常に馬鹿げたやり方です。どう考えても、双方の証人を出すべきです。こちらの審理が二十数回も続いているのに驚きます。

四月に始まって十月で結審という、ひどい発想がどこから来たのかと考えてみましたら、新指導要領の試行が始まり、入学式において日の丸・君が代の強制をする次の四月、今年の四月のことですが、そのときに先立って、それに見合った決定を先に出しておきたいということだったようです。事実を先につくって四月を迎えたいという意図が裏にあるようでした。それでたいへん温厚な弁護士さんがさすがに八月の審理のときに腹かきまして人事委員長に抗議しました。こちら側の証人を一人も採用しないとはどういうことかと抗議しますと、人事委員長は、「反対尋問をするのか、しないのか」というわけです。それに対して、質問事項だけでも十数項目あげてるではないか、それを二十分ずつでやれというのは、とても無理だということを言ったわけです。人事委員長は、これは裁判とちがう、十数項目あがっているけれども、必要な質問は五番と九番の二つじゃないか、あなたがしないなら私がしましょうと言うんです。

毎回うちの審理は入れない人がいっぱい出るほど、むちゃくちゃ多くて、中に入れるのは五十人ぐらいなんですけど、ふだんは大人しい傍聴席からこのときばかりはウワーッと抗議の声があがりまして、何も聞こえないわけです。それで弁護士さんが、これじゃやっとられんということで出ていって、僕たちはどうしていいか分からんけん困りましたが、とにかく傍聴席は残って騒然としている。そんな中で人事委員長が尋問を始めたんです。よく聞こえないんですが、口だけはパクパク動いている。あとで記録を読むと、校長も聞こえてないわけです。身を乗り出して耳うちするような形で予定された質問と答をそのまま記録しているだけなんですから、五分もあればすぐ終わります。

そういう状態の中で、なんとか十月の結審を引きのばして、第五回の審理を今年の春、四月にやりました。そのときは僕の本人尋問だったわけですが、本人尋問は最後にやるはずなのにおかしいではないかと言うと、こちら側の証人を採用するということになりました。日にちはまだ決定していませんが、十月か十一月に第六回目を予定しています。つぎは面白いですよ。四月の本人尋問のときには、こちら側の質問にこちら側が答えるということで、卒業式の様子とかについて、できあがった質問に答えていくと、向こう側の弁護士が頭かかえてうずくまってしまうんです。教育委員会の聞いたこともない不利な事実が次々と出てきて、ひどい打撃を受けたわけです。反対尋問をすればするほど、向こう側の傷口がひろがるということになりましたから、次回が楽しみです。次回はこちら側の保護者の証人を採用させることもできました。

これまで出てきた処分は、職務命令違反が信用失墜行為だということで、処分理由になっているんですが、国歌斉唱を拒否したことが信用失墜行為だなんてことは、信用を落とした人が出てこないかぎり、なかなか証明ができないですよ。これこれこういう理由で私はあの人を信頼できなくなったという人が出てきて、はじめて向こう側が説得力を持つわけですので、誰が出てくるかが楽しみです。処分も陰でごそごそやるんじゃなくて、格好

よくやってもらわなければ困ります。

PTAの会長は、インタビューに答えて新聞にも載ったんですけど、「教育の荒廃を見た」といいました。僕のクラスが荒廃していたというんですね。どこがどう荒廃していたというんでしょうね。まさか高塚高校のようではなかったと思うんですけどねえ。（笑）子供たちにしたって、私たちは荒れてたのに立ち直ったんじゃないかというのが実感なんですよ。荒廃していたというPTAの会長から、ぜひともじっくり話を聞いてみたい。この人が出てこなければ、我々は勝ちなんじゃないかと思いますし、出てきたら出てきたで、また面白い展開になると思います。そこでその荒廃していたというクラスの話をしたいと思います。

目が死んでいた子供たち

僕が最初に受け持った時には荒廃していました。子供の目がもう死んでいました。学校に来るのが楽しくないというんですね。遅刻なんてことは全く何とも思っていない。その理由が五年生の三学期に今までの担任の先生が産休に入って、つぎに来た先生に反抗を始めたことなんです。

つぎに来た先生は、五年生はこんなもんだという強い固定観念を持っていたようです。初日に顔を出したときから、一日中子供たちを怒っているわけです。挨拶の仕方がなってないから、手はズボンの縫い目に合わせろだとか、いちいち測るまではやってないでしょうけど、角度は三十度だとか（笑）、そういうことを言われて子供たちはムカッときている。給食の準備やなんかグループでしきっとらんじゃないかと帰るときまで言い続ける。親を集めて、このクラスの子供はなっとらん、どげな躾をしてきたのか、と説教する。親の方からもちょっと反発が出ましたけど、子供の方はもう全く言うことを聞かなくなる。そして給食の時には、僕もやられて一番こたえたことですが、みんながもう食べているのに、先生の給食がない。「ないじゃないか」と言ったら、「自分のことは自分でしたら！」って。（笑）……ほんとに情けない。食いもんの恨みは恐ろしくて（笑）、僕も谷底につき落とされた気分でした。仕方なく自分で取りにいくと味噌汁がない。聞くともうみんなで分けて食べたという（笑）、同じ物を食べている集団の中で、集団から完全に無視される、そういうことを、その先生は毎日やられていたわけです。

子供たちが編み出した戦法を繰り返していくうちに、授業は全く成立しなくなる。そういうことで、その先生はノイローゼになって教室に行かなくなる。すると子供たちは「勝った、勝った」という調子で、毎日毎日好きなことして遊んでるんです。のびのびしているように見えるんですけど、ほんとは面白くなかったんです。誰かリーダーシップをとってみんなで遊んだら楽しかったかもしれんけど、何かざわざわした遊びなので、だんだん学校行くのが面白くなくなってくる。でも先生がおらんけん、のびのびはしている。これじゃいけんということで、教務が入っていくことになりました。この教務は、のちに長尾小学校の教頭になりまして、さっき出てきた証人もこの人なんですが、卒業式の時に職員の机やゴミ箱まであさって職員のメモやら組合関係のチラシとかを集めて上に流す。職員会議の発言も流して、そのごほうびに教頭になったという人物です。これ、私が言ってるんじゃありませんよ、すべての分会員が言っていることを代弁しただけなんですから。

さて、その人が入って、いちばん手っ取り早い方法をやったわけです。高塚高校もそうだと思うんですけど、子供を抑えつけるのに一番早い方法は暴力です。一人引っ張りだしてきて、鼻血が出るほどぶん殴ってやれば、次はお前だといえば、子供はやっぱりこわいから、静かにしてると思うんですが、そういうことをやった。椅子とか鉄パイプでたたいたという。それで子供たちは、その先生の前では静かにしている。席を離れてどうのこう

のはなかった。でも子供たちのエネルギーはあり余ってますから、弱い子に向かって、やられたことを全部やる。大きい子が小さい子に飛び蹴りをくわせる。みんなでほうきの柄がばらばらになるほど女の子を殴る。女の子は家にかえっても、あざができていることを親にも言えない。するとやることがどんどんエスカレートしていく。しまいには、女の子がガラスの中に頭つっこんで血だらけになり、病院に運ばれるということまで起こりました。門扉で挟むということだけはなかったようですけど……。

「こいつはどげな奴かいな」

僕がこのクラスを受け持てと言われたのは、東区の学校から城南区の長尾小学校にいった最初の日、校長室に呼ばれたときのことです。六年生を持ってくれと言われて、希望は一年か二年だったんですが、理由も知らないまま、「よかですよ」と答えてしまった。あとで理由を聞いて、「しまった、イヤと言っておけばよかった」と思いました。（笑）同じ給料もろうて、五時になったら帰りたいと思っているんですが、「よかですよ」と言ってしまったもんだから、仕方なしに引き受けたんです。やはり、五時になっても帰れなかったですね。

さて、最初の日に子供を見ると、聞いてた話とだいぶ違うわけです。とにかくいいことは一つも言わんわけですよ、その教務は。つぎからつぎと悪いことばかり別のことを報告する。あれはあれで、一つの芸だと僕は思いますね。（笑）それなのに僕が教室に入るとしーんとしているんです。やはり話は話半分に聞くもんだと思ったんですが、前まで歩いてきて「こんにちわ」とか言ったらシラーッとしているんですね。姿勢がいいというんじゃなく身構えて、「こいつはどげな奴かいな」と上目づかいで見ているわけです。「これはいかんばい。早よ帰そう」と思って、すぐ帰しました。もう、ただ一応、僕の名前は井上だというのと、こういうクラスにしたいということを二つばかり言いました。一つは「たたかん」と言ったんですが、子供たちは「蹴るんじゃろう」と言うんです。（笑）もう一つ、「結果はどうでもよかけん、何か目標ば見つけてそれに向かっていくクラスにしたい」と一方的に言って、向こうの声は聞かずに帰しました。

ふつう、始業式の時には、僕の経験では何人か残っているもんです。最初の学校で「メダカのオスとメスとどうやって見分けるか知っとう？」と聞かれたのがすごく印象に残ってるんですが、まつわりついて「白髪が多いね」とか言ったり、「私のこと、好いとう？」とか（笑）聞くのが必ずいるもんです。ところが、そのクラスでは、残る子が一人もいませんで、蜘蛛の子を散らすようにさーっと帰ってしまいました。こんなクラス持たなければよかったと、しみじみ悩みました。（笑）いっときは子供の話をきいて長いこと悩み、顔を見てよけい落ち込んだりしましたが、根が真面目じゃないもんで、何とか出口が見つかりました。教室で「こら、いかんばい」とか思ってじーっとしていたとき、ふと思いつきまして、逆に考えてみたわけです。もしこのクラスが、もとの五年三組がとてもいいクラスで立派な先生がいて、そのあとを引き継いだらグチャグチャになったなんて言われたら、それこそ僕は悲しいなと思ったんです。もともとグチャグチャなクラスなら、卒業式のときまでグチャグチャでも、みんな許してくれるなあ、それに気がついたら、すーっと気が楽になったんです。よし、もうこのまま行こうと思ったんですが、それだけじゃ給料もらってるし、見栄だってありますから、とにかく一生懸命やったなというのが残ればいいんじゃないかと思って、それだけはやってみようと思いました。「何ばしようかね」というのは具体的になかったんですけど、子供たちの望むものをやっていったらいいなと思いました。

尊敬のまなざし

さて、子供を観察しとったら、サッカーが好きだったので、もう徹底的にサッカーをやりました。その中に、教科書もランドセルも何も持たず、朝からボール一個だけ持ってくる子がいました。顔を合わせりゃ、「先生、遊ぼう、サッカーしよう」と言うんです。一時間目は国語だというと、「五年のとき遊びよった」と言うんです。確かに遊んでましたよ、先生追い出して。勝利の日々は誰でも忘れられないもののようです。（笑）

ところが、サッカーしてるのを観察してると、そいつがボール持つと、誰ももう追い駆けんのです。フェイントから何から、からだ小さいのにキック力もあるし、シュートしたらよく入るし、それくらいうまかったんですけど、これが持つともう誰も取りに行かんので、天狗になってしまってるんです。ボスになって、その子が間違ったことしても、誰も何も言わん。いじめの中心にもいるし、みんなを引っ張ってムチャクチャやる。これを何とかしなければと思って、サッカーのとき、僕はぶつかっていったんですが、フェイントでこかされたりさんざんでした。しかし、こっちは大人で賢いですから、じきにパターンがつかめてくる。頭はついていけるようになったんですが、体の方はあいかわらずついていけない。こけたら子供はケッケッ笑っている。ところがあるとき、こけてふと見たら、目の前にボールが飛んでくる。それで思わずそのボールをわっと押さえたんです、反則なんですけど。すると、みんなからもう尊敬のまなざしで見られた。（笑）五年のときからサッカーやってきて誰も止めきれなかったあいつのボールを先生が止めたということで、それから信頼関係ができたわけです。（笑）給食当番もちゃんと配ってくれるようになりました。（笑）

「授業につきあっちゃろ」

四月、五月はけっこう暑いですから、朝からサッカーを二時間もやってると、服はグチャグチャですし、さすがにみんな疲れてくる。それで教室にもどって国語やろうと言うと、「仕方なかね、つきあっちゃろか。朝からつきおうてもろうたけん」（笑）というわけで、授業に入れたわけです。しかし、算数にしても、五年のときのができてないのだから、六年のやっても面白くない。それじゃあ子供たちの興味を持つものからやろう、というわけで、普通なら四年ぐらいに戻るんですが、一挙に一年まで戻って、黒板にリンゴの絵をかいて、「さあ、これは何個でしょう」とかやったわけです。

するとけっこう一年生の気になって、「三個」とかいう。そこで「じゃあ、『三』て何でしょう」というとシーンとなる。言いようがないのか、じーっと考えている。「一の三つ分ですよ」というと、「なるほど」ってこう分かってくる。そこで「『一』って何でしょう」というと、またシーンとなる。そこで大きいリンゴと小さいリンゴの絵をかいて、「どっちがほしい？」ときくと、みんな大きいリンゴがほしいという。「あれ、一と一は同じでしょ。どうしてこっちを選ぶの？　差別しちゃいかん」とか言ったら、「一」って何かが分かってくる。僕たちはふつう、リンゴを大きいとか小さいとか、赤いとか青いとか、うまいとかまずいとかで分けているけど、その中から数というものだけを取り出して、それを「一」と決めたんだというと感心する。子供たちは大きさに目をつけてしまったんですね、数ではなく。何かちょっと哲学的な話になってしまいましたが、同じリンゴ三つ分でも、勉強するのが一年生か六年生か大学生かでやっぱりちがってきます。だから本当のことはどこからでも入れると思います。そういうことをずっとやっていると、子供たちは新聞を読んで喜んで持ってくるようになります。ＵＦＯは本当にいるのかとか、いろんなことを聞いてきます。

朝鮮半島の歴史については、春ごろから、学生が火炎瓶を投げたり機動隊から袋叩きにあったりしているのをテレビでさかんにやってたし、新聞にも載っていましたから、子供たちはたいへん興味を持っていました。だから、十二月でしたかに選挙があったとき、普通は社会で使うんでしょうけど、うちでは算数で使いまして、盧泰愚の得票率を計算させました。計算は桁が大きいですから、けっこう時間がかかるんですが、割り出してみると三〇％ぐらいになる。で三〇％ぐらいで何でみんな満足できるんだ、満足しないはずだ、全斗煥の軍事政権にみんな怒っとったのにおかしいというので、みんな分析を始めたんです。そしたら、金泳三と金大中はなぜ二人立候補したのか、一緒になっていたら六〇％で圧倒的に勝っていたはずだということになりました。僕が、これも民衆支配の一つの形かも知れない、江戸時代にも似たようなことがあったんじゃないかなということを言うと、それまでいじめの中心にいたような子が、しゃべっている子に、いま勉強しとるやないか、うるさいと怒りようわけです。（笑）

また、二週間に一回ずつ、クラスで集団でやる企画に向けて実行委員会をつくらせるということをやりました。サッカーも完全にオリンピックの試合みたいにしようということで、ルールを決め、チームを作って運営も全部自分たちでやる、そういうときは丸一日かかるんです。敗者復活戦までやって、その日はもうずっとサッカーというふうにやりました。リレーのときなんか、面白かったですよ。僕が提案すると、「あげんこつ、面白くなか。きつか」と言うんです。「いや、リレーはけっこう面白いぞ。だまされたと思ってやってみよう」と言って、やってみると、いっちょん面白くなかった、やっぱりだまされたということになりました。それじゃあどげんやったら面白かったのかということを問うて話し合ったんです。好きな子どうしのチームとか、速い者ばかりのチームでは面白くないわけです。すると、子供たちは、けっこうよく知っていて、競馬のこととか、ボートレースのこととか出てくる。そこで、実行委員が、予想屋のようにレース展開を考えながら、チーム編成をしていく。もちろん賭けたりはしてません。（笑）こうしてやったら、予期したとおり、抜きつ抜かれつで面白かったということになりました。

こういった中で、いじめるとか、あいつは好かんとか言うことができない状態になってきました。そんなことしてたら負けです。勝つためにはそういうこと気にせんでやりよる。やりよるうちに、その子の別の面が見えてくる。物にはいろんな要素があって、いろんな見方ができることが分かってくるわけです。

一つの見方で人間を見たらいかんのですが、こちらの九人の先生も一つの見方をされたんでしょうねえ。（笑）ある要素だけを取り出して拡大して処分まで持っていった、これは絶対しちゃいかんことであって、その先生でもいいとこはあるんだ。（笑）そんなふうに見ていかないと、友だちの関係とか信頼とか生まれないんじゃないか、だから処分だとか、いじめるだとか、排除するだとかしてはいけない、そういうふうに僕は思うわけです。

ナウシカの旗

そういうふうにして何とか軌道に乗ってきたところで、夏休みに入りました。九月になってまたグチャグチャにならないように、何かをしないといけません。いじめたらいかんよとか仲良くしましょうとか言ってもだめです。高石が道徳だとか言っても誰も信用せんのといっしょで、そんなことは分かっとるんです。教育勅語の中に夫婦は仲良くしましょうとか言っていますが、仲良くした方がいいに決まってるんです。そんなこと言ってもだめなんで。実際の活動を作っていかないといけません。

全体を一つにまとめていく活動というわけで、教室のカーテンに大きいきれを画鋲でとめて、でっかいペンキを持ってきて見せて、

これでここにみんなで思い切りエネルギー溢れる落書きをしてみよう。それをこのクラスの旗にしたら、このクラスらしいじゃないかと言ったら、子供たちは乗りました。受けました。ところが生意気なのがおって、落書きというのは気に食わん、何かテーマをつくろう、と言うんです。ふだん国語のときには、この物語のテーマは何だといっても知らんというやつがそんなこと言うので、僕は嬉しくなって、それならすぐ話し合いに入ることにしました。うちのクラスはすぐそうしないと、次の日には「そげな話、あったかいな」（笑）ということになってしまうからです。そしたらみんなで決めたということで、黒板に三つ書くんです。いわく「誠意、愛、勇気」。僕はこういうとき、あまり発言しないんですが、司会の許可を得て一つだけ言いました。「ちょっと聞くが、この三つはうちのクラスのどこにあるのか」（笑）。子供たちはブーッとして、女の子は特に気に入ってたもんですから、「なくてもよかやないね」という返事が返ってきました。心の中にはあったんですよね。なぜ勇気なのかというと、いじめがうちのクラスにはいっぱいあった、その時に私は止めたかった、でも止めんやった、そのことが心に残っとる、その時に勇気を持って言わないかんやった、でも言いきらんやった、というようなことを言う。心の中でそんなものを求めてたんです。荒れているとか言われとったけど、みんなが求めてた、そんなことを僕は感じたんです。

それでやろうっていうんで、風の谷のナウシカを描きました。ところが、元気のいいのが、話し合いは話し合いなんですね。描くのは描くで、ていねいに下絵描いてるのに、ペンキもってワーッと描くわけです。「おい、おい」と言うと、「先生、落書きでいいって言うたやないか」。都合のいいことは絶対忘れないんですね。（笑）気のちっちゃい子とか、ていねいなチマチマした絵を描く子は、それをじーっと見てて、終わったあとに行って描きよる。今日はここまでと言って帰すと、次の日もまた元気のいいのが一番に描く。遠慮というのを知らんですね。そのたび修整を繰り返す。そのうち「俺がやってることはみんなの脚を引っ張っている」（笑）と気がついたらしくて、やや控えめになったんですけど、僕としては二度と描いてほしくないと思ったのが本音です。

ところが、結果的には、その子ら、脚を引っ張ってなかったんですね。ペンキできれいに描くというのは、たいへん難しいんです。カサカサしてペンキじゃのっていかん。ところがバーッとペンキを塗って乾くと、ツルツルになります。細かい作業をしてきた子たちはその上から描けた。大胆なあの元気のいい子たちは絵を描いてたというよりも、キャンバスを作っていた（笑）、だからすごく役に立っていた、ということにあとで気がついたわけです。その子たちに言うと、「うん、俺たちがつくった。脚引っ張ったんじゃない」（笑）。実際は脚引っ張ってたんですけど。（笑）

最後のときに、これはもう一気に完成させろうというんで、日曜日にあつまって一時から九時までかかりました。夕方帰ろうと思ったんですけど、一人二人じゃなく大勢なのでえらい出費になるし、夕食は家でとらせようと思って、「帰ろう」と言うと、「帰らん」と言うんです。「今日は完成させようというんで集まった。先生、いつも言うとるやろ。目標いっぺん立てたらやりあげろって」と言って、やりあげるまで帰らんと言うわけです。子供はうまいですね、人の言うこと取っていくのは。不用意なこと言えませんね。

九時ごろになって、ようやく出来上がったんですが、元気な子らは出番がのうなったもんですから、もう帰っていました。その子らが帰る時に、さっと筆を取り上げるんです。わあ、ここまで来てまたあいつらにやられたら大変だと思ったんですけど、さっと筆を洗いに行くんですね。そのころにはもう筆はペンキだらけでしたから、洗いに行ってこれで描けというんです。裏方をやっているんです。